

学習障害に関する研究

(分担研究者 竹下 研三)
研究協力者 進藤美津子¹⁾
共同研究者 玉井ふみ¹⁾、山崎和子¹⁾、城本貞子¹⁾、冨田 豊²⁾

要約：学習障害児の言語障害と指導について検討するにあたり、コミュニケーションの問題を主訴に相談に訪れたいわゆる広汎性発達障害児の聴覚的言語理解の問題について検討を行った。さらに健常な学童の聴覚（語音）認知の発達を、ことばの分節的な側面と超分節的な側面から比較検討した。これらの視点を踏まえ、今後はさらに学習障害児の聴覚的理解障害とその指導法について検討していきたい。

見出し語：学習障害、聴覚的言語理解障害、指導法

はじめに：

学習障害児の言語障害と指導について検討するにあたり、コミュニケーションの問題を主訴に相談に訪れ、WPPSIあるいはWISC-Rを実施できた子どもの中で、PIQの方がVIQよりも20～40程度高い、いわゆる広汎性発達障害児の聴覚的言語理解力を検討した。さらに健常児（小学生）において検討を行った聴覚認知の発達テストについて報告する。

研究方法：

1. 広汎性発達障害児の聴覚的言語理解力の問題について

6名の広汎性発達障害児についてWPPSI、あるいはWISC-Rを実施し、共通のコミュニケーションの問題点を検討した。さらに2名について聴覚的理解力を精査するために、単語レベルの理解をみる“絵画語彙発達検査”および文レベルの理解をはかる“失語症構文検査”を行った。

2. 学童の聴覚（語音）認知の発達について

神奈川県内の小学1年～6年生の健常児各学年10名ずつ計60名を対象として、次の4種類の語音認知検査を実施した。なお、対照群として20歳台の健常成人10名にも同様の検査を実施した。

①CV音節聴取テスト（日本語音53音節の語表よりなる）：テープレコーダーより受話器を通じて聴取し、書取りあるいは復唱させた。②最小弁別テスト（10ペアの最小対立語よりなる）、③長母音vs短母音の弁別テスト（10ペアの長短母音の対立語よりなる）、④アクセント弁別テスト（10ペアの高低アクセントの対立語よりなる）：各テストともテープレコーダに録音された検査語音を絵で示された選択肢の中から該当する絵を指さして答えてもらった。

結果：

1. 広汎性発達障害児の聴覚的言語理解力の問題について

1) コミュニケーションの問題を主訴に相談に訪れた6名の広汎性発達障害児（5歳3か月～15歳8か月：平均年齢8歳8か月）に共通にみられた特徴：ことばの遅れ、構音障害、聴覚的言語理解の問題、傾聴態度が乏しい、自己中心性が強い、落ち着きがないなどであった。WPPSIあるいはWISC-R知能診断検査では、全例ともVIQ（58～89：平均75）よりもPIQ（91～132：平均106）の方が20～40程度高く、言語性の課題が苦手なことが示された。

2) 2症例の聴覚的言語理解について

上記6例のうち特に現在指導中の2例について、単語および文レベルの聴覚的言語理解力を検討した。症例K（5：6、男児）はWPPSIの下位検査の項目では、「単語問題」が最も低成績であり、絵画語彙検査による理解語彙の発達は4歳レベル、構文検査による文の聴覚的理解の発達は3歳レベルであった。症例S（6：6、男児）はWISC-Rでは「算数」問題

が最も低成績であり、絵画語彙検査による理解語彙の発達は5歳3か月レベルであり、構文検査による文の聴覚的理解の発達は3～4歳レベルであった。

2. 学童の聴覚（語音）認知の発達について

4種類の語音認知検査の小学生の結果と健常成人の結果を比較すると、CV音節聴取テストおよび最小弁別テストでは小学5年生で健常成人と同等なレベルに達し、長母音vs短母音の弁別テストおよびアクセント弁別テストでは小学2年生で健常成人のレベルに達していた。

考察：

いわゆる広汎性発達障害児にみられた聴覚的言語理解の問題について掘り下げテストを実施し検討したところ、次のような特徴がみられた。単語の聴覚的理解では、2症例とも1歳4～9か月の発達の遅れがみられ、いずれも具象名詞は比較的習得されていたが、抽象的な語彙の理解が遅れていた。syntaxの側面に基づいた文の聴覚的理解では、症例Kでは語の意味に基づいた理解の段階で3歳レベルの発達、症例Sでは語順に基づいた理解の段階で3～4歳レベルの発達を呈しており、2例とも構文の理解の発達の遅れが顕著であった。これらの結果から、子どもの聴覚的言語理解の遅れについて分析的に検討することにより、理解のつまずきのレベルを推定でき、指導法を考える上でも有意義であると考えられる。

一方、健常の学童に行った語音認知検査の結果より、CV音節の語音認知や最小弁別のような分節的な音韻レベルの認知は小学5年生で成人とほぼ同じレベルの結果が得られたが、母音の長短の弁別やアクセントの弁別のような超分節的な認知は、小学2年生で成人とほぼ同様な結果が得られた。これらのことから、子どもでは分節的な認知よりも超分節的な認知の方が容易であり、発達も早いことが考えられる。したがって、聴覚的理解の発達に遅れがある子どもの指導において、このようなことばの超分節的な面を利用した指導法を工夫する必要があると考えられる。

今後はさらに学習障害児の言語障害と指導について検討を進める中で、次のような視点で聴覚的理解の問題に取り組んでいきたいと考える。①学習障害児の聴覚認知の神経心理学的な検討：分節的な認知と超分節的な認知の再検討、②学習障害児の聴覚的な意味理解障害の神経心理学的な検討：階層別にみた単語および文の聴覚的言語理解の検討、③聴覚的理解障害に対する指導法の検討を行う。

文献：

- 1) 進藤美津子他：いわゆる学習障害児の研究(1)。音声言語医学。29:174-184, 1988.
- 2) 進藤美津子他：聴皮質・聴放線損傷例における言語音および音の要素の認知。音声言語医学。35:295-306, 1994.

1) 広島県立保健福祉短期大学 言語聴覚療法学科, 2) 同大学 作業療法学科



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:学習障害児の言語障害と指導について検討するにあたり,コミュニケーションの問題を主訴に相談に訪れたいわゆる広汎性発達障害児の聴覚的言語理解の問題について検討を行った。さらに健常な学童の聴覚(語音)認知の発達を,ことばの分節的な側面と超分節的な側面から比較検討した。これらの視点を踏まえ,今後はさらに学習障害児の聴覚的理解障害とその指導法について検討していきたい。